

# 秘密

谷崎潤一郎

青空文庫



その頃ころ私は或ある気き紛まれな考かんから、今いま迄まで自分の身のまわりを裏つんで居た賑にぎやかな雰ふん囲い気を遠とざかつて、いろいろの關係で交際を續けて居た男や女の圈内から、ひそかに逃れ出ようと思ひ、方々と適當な隠れ家を捜し求めた揚句、浅草の松葉町辺に真しん言ごん宗しゅうの寺のあるのを見附けて、ようよう其そこ処この庫裡くりの一と間を借り受けることになつた。

新堀の溝みぞへついて、菊屋橋から門もん跡ぜきの裏手を真まつ直すぐに行つたところ、十二階の下の方の、うるさく入り組んだObscureな町の中にその寺はあつた。ごみ溜ための箱を覆くつがえした如ごとく、あの辺一帯にひろがって居る貧民窟ひんみんくつの片側に、黄橙だいだい色の土塀どべいの壁が長く続

いて、如何にも落ち着いていた、重々しい寂しい感じを与える構えであつた。

私は最初から、渋谷だの大久保だのと云う郊外へ隠遁するよりも、却つて市内の何処かに人の心附かない、不思議なさびれた所があるであろうと思つていた。丁度瀬の早い溪川のところどころに、澱んだ淵が出来るように、下町の雑沓する巷と巷の間に挟まりながら、極めて特殊の場合か、特殊の人でもなければめつたに通行しないような閑静な一郭が、なければなるまいと思つていた。

同時に又こんな事も考えて見た。——

己は随分旅行好きで、京都、仙台、北海道から九州までも歩いて

来た。けれども未だこの東京の町の中に、人形町で生れて二十年  
来永住している東京の町の中に、一度も足を踏み入れた事のない  
と云う通りが、屹度あるに違いない。いや、思ったより沢山ある  
に違いない。

そうして大都会の下町に、蜂の巢の如く交錯している大小無数の  
街路のうち、私が通った事のある所と、ない所では、孰方が多い  
かちよいと判らなくなつて来た。

何でも十一二歳の頃であつたらう。父と一緒に深川の八幡様へ  
行つた時、

「これから渡しを渡つて、冬木の米市で名代のそばを御馳走し  
てやるかな。」

こう云つて、父は私を境<sup>けいだい</sup>内の社殿<sup>うしろ</sup>の後の方へ連れて行つた事がある。其処には小網町や小舟町辺の掘割と全く趣の違つた、幅の狭い、岸の低い、水の一杯にふくれ上つている川が、細かく建て込んでゐる両岸の家々の、軒と軒とを押し分けるように、どんよりと物憂<sup>ものう</sup>く流れて居た。小さな渡し船は、川幅よりも長そうな荷足り<sup>てんま</sup>や伝馬<sup>いくそう</sup>が、幾艘も縦<sup>なら</sup>に列んでゐる間を縫いながら、二た竿<sup>さお</sup>三竿ばかりちよろちよろと水底<sup>みなそこ</sup>を衝<sup>つ</sup>いて往復して居た。

私はその時まで、たびたび八幡様へお参りをしたが、未だ嘗<sup>かつ</sup>て境内の裏手がどんなになつてゐるか考えて見たことはなかつた。いつも正面の鳥居の方から社殿を拝むだけで、恐らくパノラマの絵のように、表ばかりで裏のない、行き止まりの景色のように自然

と考へていたのであろう。現在眼の前にこんな川や渡し場が見えて、その先に広い地面が果てしもなく続いている謎なぞのような光景を見ると、何となく京都や大阪よりももつと東京をかけ離れた、夢の中で屢々しばしば出逢うことのある世界の如く思われた。

それから私は、浅草の観音堂の真うしろにはどんな町があつたか想像して見たが、仲店なかみせの通りから宏こうだい大な朱塗りのお堂の叢いらかを望んだ時の有様ばかりが明瞭めいりょうに描かれ、その外の点はほとんど頭に浮かばなかつた。だんだん大人になつて、世間が広くなるに随したがい、知人の家を訪ねたり、花見遊山ゆざんに出かけたり、東京市中は限くまなく歩いたようであるが、いまだに子供の時分経験したような不思議な別世界へ、ハタリと行き逢うことがたびたびあつた。

そう云う別世界こそ、身を匿すには究 竟であろうと思つて、  
此処ここ彼処かしこといろいろに捜し求めて見れば見る程、今迄通つたこと  
のない区域いたところが到る処いたところに発見された。浅草橋と和泉橋いずみは幾度も渡つ  
て置きながら、その間にある左衛門橋を渡つたことがない。一一いちいち  
長町うまちの市村座へ行くのには、いつも電車通りからそばやの角を  
右へ曲つたが、あの芝居の前を真っ直ぐに柳盛座の方へ出る二三  
町ばかりの地面は、一度も踏んだ覚えはなかつた。昔の永代橋えいたい  
の右岸たもとの袂たもとから、左の方の河岸かしはどんな工合になつて居たか、ど  
うも好く判らなかつた。その外八丁堀、越前堀、三味線堀しやみせんぼり、山  
谷堀んやの界隈かいわいには、まだまだ知らない所が沢山あるらしかつた。  
松葉町のお寺の近傍は、そのうちでも一番奇妙な町であつた。六



区と吉原を鼻先に控えてちよいと横丁を一つ曲った所に、淋しい、  
廃れたような区域を作っているのが非常に私の氣に入つて了つた。  
今迄自分の無二の親友であつた「派手な贅沢なそうして平凡な  
東京」と云う奴を置いてき堀にして、静かにその騷擾を傍観  
しながら、こつそり身を隠して居られるのが、愉快でならなかつ  
た。

隠遁をした目的は、別段勉強をする為めではない。その頃私の神  
経は、刃の擦り切れたやすりのように、鋭敏な角々がすっかり鈍  
つて、余程色彩の濃い、あくどい物に出逢わなければ、何の感興  
も湧かなかつた。微細な感受性の働きを要求する一流の芸術だと  
か、一流の料理だとかを翫味するのが、不可能になつていた。下

町の粹いきと云われる茶屋の板前に感心して見たり、仁左衛門にざえもんや鷹がんじ

治郎ちろうの技巧を賞美したり、凡すべて在り来たりの都会の歡樂を受

け入れるには、あまり心が荒すさんでいた。惰力の為めに面白くもな

い懶惰らんたな生活を、毎日々々繰り返して居るのが、堪えられなくな

つて、全然旧套きゆうとうを擺脱はいだつした、物好きな、アーティフィシヤ

ルな、Mode of lifeを見出みいだして見たかつたのである。

普通の刺戟しげきに馴なれて了つた神経を顫ふるい戦おのかすような、何か不思議

な、奇怪な事はないであろうか。現実をかけ離れた野蛮な荒唐な

夢幻的な空気の中に、棲息せいそくすることは出来ないであろうか。こ

う思つて私の魂は遠くバビロンやアッシリヤの古代の伝説の世界

にさ迷つたり、コナンドイルや涙るい香こうの探偵小説を想像したり、

光線の熾烈しれつな熱帯地方の焦土と緑野を恋い慕ったり、腕白な少年時代のエクセントリックな悪戯あくぎに憧あこがれたりした。

賑かな世間から不意に韜晦とうかいして、行動を唯徒ただたずらに秘密にして見るだけでも、すでに一種のミステリアスな、ロマンチックな色彩を自分の生活に賦与ふよすることが出来ると思った。私は秘密と云う物の面白さを、子供の時分からしみじみと味わって居た。かくれんぼ、宝さがし、お茶坊主ちやぼうずのような遊戯——殊ことに、それが闇やみの晩、うす暗い物置小屋や、観音開きの前などで行われる時の面白味は、主としてその間に「秘密」と云う不思議な気分が潜んで居るせいであつたに違いない。

私はもう一度幼年時代の隠れん坊のような気持を経験して見たさ

に、わざと人の気の附かない下町の曖昧あいまいなところに身を隠したのであった。そのお寺の宗旨が「秘密」とか、「禁厭ましない」とか、「呪詛じゆそ」とか云うものに縁の深い真言宗であることも、私の好奇心を誘うて、妄想もうそうを育はぐくませるには恰好かつこうであった。部屋は新しく建て増した庫裡の一部で、南を向いた八畳敷きの、日に焼けて少し茶色がかっている畳が、却って見た眼には安らかな暖かい感じを与えた。昼過ぎになると和やかな秋の日が、幻燈げんとうの如くあかあかと縁側の障子しょうじに燃えて、室内は大きな雪洞ほんぼりのように明るかった。

それから私は、今迄親しんで居た哲学や芸術に関する書類を一切とだな戸棚へ片付けて了って、魔術だの、催眠術だの、探偵小説だの、

化学だの、解剖学だのの奇怪な説話と挿絵さしえに富んでいる書物を、  
 さながら土用干どようぼしの如く部屋中へ置き散らして、寝ころびながら、  
 手あたり次第に繰りひろげては耽たんどく読した。その中には、コナン  
 ドイルの The Sign of Four や、ドキンシイの Murder, Considered as  
 one of the fine arts や、アラビアンナイトのようなお伽とぎやぶなし 噺ばなしから、  
 フランス 仏蘭西の不思議な Sexuology の本なども交っていた。  
 此処の住職が秘していた地獄極楽の図を始め、須弥山しゆみせん図ずだの涅槃ね  
はんぞう像ぞうだの、いろいろの、古い仏画を強しいて懇望して、丁度学校  
 の教員室に掛っている地図のように、所嫌きらいわず部屋の四壁へぶら  
 下げて見た。床の間の香炉からは、始終紫色の香の煙が真っ直ぐ  
 に静かに立ち昇って、明るい暖かい室内を焚たきしめて居た。私は

時々菊屋橋際ぎわの舗みせへ行つて白檀びやくだんや沈香じんこうを買つて来てはそれを燻くべた。

天氣の好い日、きらきらとした真昼の光線が一杯に障子へあたる時の室内は、眼の醒さめるような壯觀を呈した。絢爛けんらんな色彩の古画の諸仏、羅漢らかん、比丘びく、比丘尼びくに、優婆塞うばそく、優婆夷うばい、象、獅子、麒麟りんなどが四壁の紙幅の内から、ゆたかな光の中に泳ぎ出す。畳の上に投げ出された無数の書物からは、慘殺ざんさつ、麻醉、魔薬、妖ようじ女よ、宗教——種々雑多の傀儡かいらいが、香の煙に溶け込んで、朦朧ろうろうと立ち罩こめる中に、二畳ばかりの緋毛氈ひもうせんを敷き、どんよりとした蛮人のような瞳ひとみを据すえて、寝ころんだ儘まま、私は毎日々々幻覚を胸に描いた。

夜の九時頃、寺の者が大概寝静まつて了うとウヰスキーの角壘かくびんを叩あおつて酔いを買つた後、勝手に縁側の雨戸を引き外し、墓地の生いけ垣がきを乗り越えて散歩に出かけた。成る可べく人目にかからぬように毎晩服装を取り換えて公園の雑沓ざつとうの中を潜くぐつて歩いたり、古道具屋や古本屋の店先を漁あさり廻まわつたりした。頬冠ほおかむりに唐棧とうざんの半纏はんてんを引つ掛け、綺麗きれいに研みがいた素足へ爪つま爪べに紅をさして雪駄せつたを穿はくこともあつた。金縁の色眼鏡に二重廻にじゅうまわしの襟えりを立てて出ることもあつた。着つけ髭ひげ、ほくろ、痣あざと、いろいろに面めん体ていを換えるのを面白がったが、或る晩、三味線堀の古着屋で、藍地あいじに大小あられの小紋を散らした女物の袷あわせが眼に附いてから、急にそれが着て見たくてたまらなくなつた。

一体私は衣服反物に対して、単に色合が好いとか柄が粹いだとかい  
う以外に、もつと深く鋭い愛着心を持つて居た。女物に限らず、  
凡べて美しい絹物を見たり、触れたりする時は、何となく顫い附  
きたくなつて、丁度恋人の肌はだの色を眺ながめるような快感の高潮に達  
することが屢々であつた。殊に私の大好きなお召や縮ちりめ緬めんを、世  
間はば憚からず、恣ほにしい着飾ままままの出来る女の境遇を、嫉ねたましく思うこ  
とさえあつた。

あの古着屋の店にだらりと生々しく下つて居る小紋縮緬の袷——  
—あのしつとりした、重い冷たい布きれが粘ねばつくように肉体を包む時  
の心好さを思うと、私は思わず戦せん慄りつした。あの着物を着て、女  
の姿で往来を歩いて見たい。……こう思つて、私は一も二もな



くそれを買う気になり、ついでに友禪ゆうぜんの長襦袢ながじゆばんや、黒縮緬くろちぢみの羽織うゑ迄も取りそろえた。

大柄おほがらの女が着たものと見えて、小男の私には寸法も打つてつけであつた。夜が更ふけてがらんとした寺中てらなかつがひっそりした時分、私はひそかに鏡台きやうだいに向つて化粧けしょうを始めた。黄色きせきい生地きぢの鼻柱なまへ先まずベツトリと練りお白粉しろいをなすり着けた瞬間しゆんかんの容貌ようぼうは、少しグロテスクに見えたが、濃い白い粘液ねんえきを平手で顔中へ万遍なく押し拵ひろげると、思ったよりものが好く、甘い匂においのひやひやとした露つゆが、毛孔けあなへ沁しみ入る皮膚ひふのよろこびは、格別かくべつであつた。紅べにやとのこを塗ぬるに随したがつて、石膏せつこうの如く唯徒ただらに真まつ白しろであつた私の顔かほが、澁しぶ刺らつとした生色なまぢある女の相あひだに變かつて行く面白おもしろさ。文士ぶんしや画家がけいの

芸術よりも、俳優や芸者や一般の女が、日常自分の体の肉を材料として試みている化粧の技巧の方が、遥かに興味の多いことを知った。

長襦袢、半襟、腰巻、それからチュツチュツと鳴る紅絹裏の袂、

——私の肉体は、凡べて普通の女の皮膚が味わうと同等の触感を与えられ、襟足から手頸まで白く塗って、銀杏返しいちようがえの鬘の上

にお高祖頭巾こそずきんを冠かぶり、思い切つて往来の夜道へ紛れ込んで見た。

雨曇りのしたうす暗い晩であつた。千束町せんぞく、清住町きよすみちよう、龍

泉寺町せんじ——あの辺一帶の溝の多い、淋しい街を暫くさまよつ

て見たが、交番の巡查も、通行人も、一向気が附かないようであつた。甘皮あまかわを一枚張つたようにはさばさ乾いている顔の上を、

夜風が冷やかに撫でて行く。口辺を蔽うて居る頭巾の布が、息の  
ために熱く湿つて、歩きたびに長い縮緬の腰卷の裾は、じやれる  
ように脚へ纏れる。みぞおちから肋骨の辺を堅く緊め附けている  
丸帯と、骨盤の上を括っている扱帯の加減で、私の体の血管には、  
自然と女のような血が流れ始め、男らしい気分や姿勢はだんだん  
となくなつて行くようであつた。

友禪の袖の蔭から、お白粉を塗つた手をつき出して見ると、強い  
頑丈な線が闇の中に消えて、白くふつくらと柔かに浮き出  
ている。私は自分で自分の手の美しさに惚れ惚れとした。このよう  
な美しい手を、実際に持っている女と云う者が、羨ましく感じら  
れた。芝居の弁天小僧のように、こう云う姿をして、さまざまの

罪を犯したならば、どんなに面白いであろう。……探偵小説や、犯罪小説の読者を始終喜ばせる「秘密」「疑惑」の氣分に鬚鬚ほうふつとした心持で、私は次第に人通りの多い、公園の六区の方へ歩みを運んだ。そうして、殺人とか、強盜とか、何か非常な残忍な悪事を働いた人間のように、自分を思い込むことが出来た。

十二階の前から、池の汀みぎわについて、オペラ館の四つ角へ出ると、イルミネーションとアーク燈の光が厚化粧をした私の顔にきらきらと照つて、着物の色合いや縞目しまめがはつきりと読める。常盤座ときわざの前へ来た時、突き当たりの写真屋の玄関の大鏡へ、ぞろぞろ雑沓する群集の中に交つて、立派に女と化け終おほせた私の姿が映つて居た。

こツてり塗り附けたお白粉の下に、「男」と云う秘密が悉く隠されて、眼つきも口つきも女のように動き、女のように笑おうとする。甘いへんのうの匂いと、囁くような衣摺れの音を立てて、私の前後を擦れ違う幾人の女の群も、皆私を同類と認めて訝しめない。そうしてその女達の中には、私の優雅な顔の作りと、古風な衣裳の好みとを、羨ましそうに見ている者もある。

いつも見馴れて居る公園の夜の騷擾も、「秘密」を持つて居る私の眼には、凡べてが新しかった。何処へ行つても、何を見ても、始めて接する物のように、珍しく奇妙であつた。人間の瞳を欺き、電燈の光を欺いて、濃艶な脂粉とちりめんの衣装の下に自分を潜ませながら、「秘密」の帷を一枚隔てて眺めるために、

恐らく平凡な現実が、夢のような不思議な色彩を施されるのであろう。

それから私は毎晩のようにこの仮装をつづけて、時とすると、宮戸座の立ち見や活動写真の見物の間へ、平気で割って入るようになった。寺へ帰るのは十二時近くであったが、座敷に上ると早速空気ランプをつけて、疲れた体の衣裳も解かず、毛氈の上へぐつたり嫌いやらしく寝崩れた儘、残り惜しそうに絢爛な着物の色を眺めたり、袖口をちやらちやらと振って見たりした。剥はげかかったお白粉が肌理きめの粗あらいたるんだ頬の皮へ滲しみ着いて居るのを、鏡に映して凝視して居ると、廃はい顔たいした快感が古い葡萄酒ぶどうしゆの酔いのように魂をそそった。地獄極楽の図を背景にして、けばけばしい長

襦袢のまま、遊女の如くなよなよと蒲団ふとんの上へ腹這はらばつて、例の奇怪な書物のページを夜更くる迄ひるがえ翻すこともあつた。次第に扮装ふんそうも巧うまくなり、大胆にもなつて、物好きあいくちな聯想れんそうを醸かもさせる為めに、  
ヒ首あいくちだの麻醉薬はきだのを、帯の間へ挿はさんでは外出した。犯罪を行わずに、犯罪に付随して居る美しい口マンチツクの匂いだけを、十分に嗅かいで見たかつたのである。

そうして、一週間ばかり過ぎた或る晩の事、私は図らずも不思議な因縁から、もツと奇怪なもツと物好きあいくちな、そうしてもツと神秘的な事件の端緒でくわに出会した。

その晩私は、いつもよりも多量にウヰスキーを呷あつて、三友館の二階の貴賓席に上り込んで居た。何でももう十時近くであつたら

う、恐ろしく混こんでいる場内は、霧のような濁った空気に充みたさ  
れて、黒く、もくもくとかたまつて 蠢しゅんどう 動どうしている群衆の生温  
かい人いきれが、顔のお白粉を腐らせるように漂つて居た。暗中  
にシャキシヤキ軋きしみながら目まぐるしく展開して行く映画の光線  
の、グリグリと瞳を刺す度たびごと毎に、私の酔った頭は破われるように  
痛んだ。時々映画が消えてぱツと電燈がつくと、溪たにそこ底そこから沸き  
上る雲のように、階下の群衆の頭の上を浮動して居る煙草たばこの烟けむりの  
間を透かして、私は真深いお高祖頭巾の蔭から、場内に溢あふれて居  
る人々の顔を見廻した。そうして私の旧式な頭巾の姿を珍めづしそう  
に窺うかがつて居る男や、粋な着附けの色合を物欲しそうに盗み視みてい  
る女の多いのを、心ひそかに得意として居た。見物の女のうちに、



いでたちの異様な点から、様子の婀娜あだっぽい点から、乃至ないし器量の点からも、私ほど人の眼に着いた者はないらしかった。

始めは誰も居なかつた筈はずの貴賓席の私の側そばの椅子いすが、いつの間に塞ふさがったのか能くは知らないが、二三度目に再び電燈がともされた時、私の左隣りに二人の男女が腰をかけて居るのに気が附いた。女は二十二三と見えるが、その実六七にもなるであろう。髪を三つ輪に結つて、総身をお召の空色のマントに包み、くつきりと水のしたたるような鮮やかな美貌びぼうばかりを、これ見よがしに露あらわにして居る。芸者とも令嬢とも判断のつき兼ねる所はあるが、連れの紳士の態度から推して、堅儀かたぎの細君ではないらしい。

「……………Arrested at last. ……………」

と、女は小声で、ファイルムの上に現れた説明書を読み上げて、土<sup>ト</sup>耳<sup>ル</sup>古<sup>コ</sup>卷<sup>ク</sup>のM.C.C.の薰<sup>かお</sup>りの高い烟を私の顔に吹き附けながら、指<sup>は</sup>に箆<sup>は</sup>めて居る宝石よりも鋭く輝く大きい瞳を、闇の中できらりと私の方へ注いだ。

あでやかな姿に似合わぬ太<sup>ふとぎ</sup>棹<sup>お</sup>の師匠のような皺<sup>しわ</sup>噎<sup>が</sup>れた声、――

――その声は紛れもない、私が二三年前に上<sup>シャン</sup>海<sup>ハイ</sup>へ旅行する航海の途中、ふとした事から汽船の中で暫く関係を結んで居たT女であつた。

女はその頃<sup>ころ</sup>から、商売人とも素<sup>しろ</sup>人<sup>うと</sup>とも区別のつかない素振りや服装を持って居たように覚えて居る。船中に同伴して居た男と、今夜の男とはまるで風<sup>ふう</sup>采<sup>さい</sup>も容貌も変つて居るが、多分はこの二

人の男の間を連結する無数の男が女の過去の生しょう涯がいを鎖くわのよう  
 に貫いて居るのであろう。兎とも角かくその婦人が、始終一人の男から  
 他の男へと、胡蝶こちょうのように飛んで歩く種類の女であることは確  
 かであつた。二年前に船で馴染なじみになつた時、二人はいろいろの  
 事情から本当の氏名も名乗り合わず、境遇も住所も知らせずにい  
 るうちに上海へ着いた。そうして私は自分に恋い憧れている女を  
 好い加減に欺き、こツそり跡をくらまして了しまつた。以来太平洋上  
 の夢の中なる女とばかり思つて居たその人の姿を、こんな処ところで見  
 ようとは全く意外である。あの時分やや小太りに肥えて居た女は、  
 神こうごう々ごうしい迄までに瘦やせて、すツきりとして、睫毛まつげの長い潤味うるみを持つつ  
 た円まなこい眼こが、拭ぬぐうが如ごとくに冴さえ返り、男を男とも思わぬような凜り

々しい權威さえ具そなえている。触るるものに紅くれなの血が濁染にじむかと疑われた生々しい唇くちびると、耳みみたぶ朶の隠れそうな長い生はえ際ぎわばかりは昔に変わらないが、鼻は以前よりも少し嶮けわしい位に高く見えた。

女は果たして私に気が附いて居るのであるうか。どうも判然と確かめることが出来なかつた。明あかりがつくと連れの男にひそひそ戯たわむれて居る様子は、傍に居る私を普通の女さげすと蔑すんで、別段心にかけて居ないようでもあつた。實際その女の隣りに居ると、私は今迄得意であつた自分の扮装を卑いやしまない訳には行かなかつた。表情の自由な、如何いかにも生き生きとした妖女ようじよの魅力に気圧けおされて、技巧を尽した化粧も着附けも、醜く浅ましい化物のような気がした。女らしいと云う点からも、美しい器量からも、私は到底彼女

の競争者ではなく、月の前の星のように果敢なく萎れて了うのであつた。

朦々と立ち罩めた場内の汚れた空気の中に、曇りのない鮮明な輪郭をくつきりと浮かばせて、マントの蔭からしなやかな手をちらちらと、魚のように泳がせているあでやかさ。男と対談する間にも時々夢のような瞳を上げて、天井を仰いだり、眉根を寄せて群衆を見下ろしたり、真つ白な歯並みを見せて微笑んだり、その度毎に全く別趣の表情が、溢れんばかりに湛えられる。如何なる意味をも鮮やかに表し得る黒い大きい瞳は、場内の二つの宝石のように、遠い階下の隅からも認められる。顔面の凡べての道具が単に物を見たり、嗅いだり、聞いたり、語ったりする機関として

は、あまりに余情に富み過ぎて、人間の顔と云うよりも、男の心を誘惑する甘味ある餌食えじきであつた。

もう場内の視線は、一つも私の方に注がれて居なかつた。愚かにも、私は自分の人気を奪い去つたその女の美貌しつとに対して、嫉妬しつとと憤怒ふんぬを感じ始めた。嘗ては自分が弄もてあそほんで恣まに棄ててしまつた女の容貌ふの魅力に、忽たちまち光を消されて踏み附けられて行く口惜しさ。事に依よると女は私を認めて居ながら、わざと皮肉な復讐ふくしゅうをして居るのではないであらうか。

私は美貌を羨む嫉妬の情が、胸の中で次第々々に恋慕の情に變つて行くのを覚えた。女としての競争に敗れた私は、今一度男として彼女を征服して勝ち誇つてやりたい。こう思うと、抑え難い欲

望に駆られてしなやかな女の体を、いきなりむずと驚<sup>わしづか</sup>掴みにし  
て、揺す振つて見たくもなつた。

君は予の誰なるかを知り給<sup>たま</sup>うや。今夜久しぶりに君を見て、予  
は再び君を恋し始めたり。今一度、予と握手し給うお心はなき  
か。明晩もこの席に来て、予を待ち給うお心はなきか。予は予  
の住所を何人にも告げ知らす事を好まねば、唯願<sup>ただ</sup>わくは明日の  
今頃、この席に来て予を待ち給え。

闇<sup>やみ</sup>に紛れて私は帯の間から半紙と鉛筆を取出し、こんな走り書き  
をしたものをひそかに女の袂<sup>たもと</sup>へ投げ込んだ、そうして、又じつと  
先方の様子を窺っていた。

十一時頃、活動写真の終るまでは女は静かに見物していた。観客

が総立ちになつてどやどやと場外へ崩れ出す混雑の際、女はもう一度、私の耳元で、

「…………… Arrested at last. ……………」

と囁きながら、前よりも自信のある大胆な凝視ぎようしを、私の顔に暫く注いで、やがて男と一緒に人ごみの中へ隠れてしまった。

「…………… Arrested at last. ……………」

女はいつの間にか自分を見附け出して居たのだ。こう思つて私は竦然しやうぜんとした。

それにしても明日の晩、素直に来てくれるであらうか。大分昔よりは年功を経ているらしい相手の力量を測らずに、あのような真似まねをして、却かえつて弱点を握られはしまいか。いろいろの不安と疑ぎ



ぐさしはさ  
 惧に挟まれながら私は寺へ歸つた。

いつものように上着を脱いで、長襦袢一枚になろうとする時、ぱらりと頭巾の裏から四角にたたんだ小さい洋紙の切れが落ちた。

「Mr. S. K.」

と書き続けたインキの痕あとをすかして見ると、玉甲斐絹たまかいぎのように光っている。正しく彼女の手であつた。見物中、一二度小用に立つたようであつたが、早くもその間に、返事をしたためて、人知れず私の襟えりもと元へさし込んだものと見える。

思いがけなき所にて思いがけなき君の姿を見申候そうろう。たとい装いを変え給うとも、三年このかた夢寐むびにも忘れぬ御面影おんおもかげを、いかに見逃し候べきわらわ。妾わらわは始めより頭巾の女の君なる事を承知仕つかまつり

候。それにつけても相変わらず物好きなる君にておわせしこと  
 の可笑おかしさよ。妾に会わんと仰おほせらるるも多分はこの物好きの  
 おん興きんじにやと心こころ許もとなく存じ候えども、あまりの嬉うれしさに  
 兎角うづつの分別べんべつも出いでず、唯仰せに従い明夜は必ず御待べち申す可べ  
 候。ただし、妾に少々都合もあり、考えも有これあり之そ候そうらえば、九  
 時より九時半までの間に雷かみなり門もんまでお出で下されまじくや。  
そこ其処そこにて当方より差し向けたるお迎いの車夫が、必ず君を見つ  
 け出して拙宅へご案内致す可く候。君の御住所を秘し給うと同  
 様に、妾も今の在り家を御知らせ致さぬ所存にて、車上の君に  
 眼隠しをしてお連れ申すよう取りはからわせ候間、右御許ご下  
 され度たく、若もしこの一事を御承引下され候まわらずば、妾は永遠に君

を見ることかなわず、これに過ぎたる悲しみは無<sup>これなく</sup>之候。

私はこの手紙を読んで行くうちに、自分がいつの間にか探偵小説中の人物となり終せて居るのを感じた。不思議な好奇心と恐怖とが、頭の中で渦<sup>うず</sup>を巻いた。女が自分の性癖を呑<sup>の</sup>み込んで居て、わざとこんな真似をするのかとも思われた。

明くる日の晩は素晴らしい大雨であった。私はすっかり服装を改めて、対<sup>つい</sup>の大島の上にゴム引きの外<sup>がいとう</sup>套<sup>ま</sup>を纏<sup>まと</sup>い、ざぶん、ざぶんと、甲斐絹張りの洋傘に、滝<sup>たき</sup>の如<sup>ごと</sup>くたたきつける雨の中を戸外へ出た。新堀の溝<sup>みぞ</sup>が往来一円に溢れているので、私は足袋<sup>たびふところ</sup>を懐へ入れたが、びしょびしょに濡<sup>ぬ</sup>れた素足が家並みのランプに照らされて、ぴかぴか光って居た。夥<sup>おびただ</sup>しい雨量が、天からざあざあと直<sup>ちよく</sup>

瀉しゃする喧囂けんこうの中に、何もかも打ち消されて、ふだん賑にぎやかな  
広小路の通りも大概雨戸を締め切り、二三人の臀端折しりはしよりの男が、  
敗走した兵士のように駈かけ出して行く。電車が時々レールの上に  
溜たまった水をほとぼしらせて通る外は、ところどころの電柱や広  
告のあたりが、朦朧たる雨の空中をぼんやり照らしているばかり  
であつた。

外套から、手首から、肘ひじの辺まで水だらけになつて、漸く雷門へ  
来た私は、雨中にしよんぼり立ち止りながらアーク燈の光を透か  
して、四辺あたりを見廻みまわしたが、一つも人影は見えない。何処どこかの暗い  
隅に隠れて、何者かが私の様子を窺のぞっているのかも知れない。こ  
う思つて暫たくたゞず居ると、やがて吾妻橋の方の暗闇くらやみから、赤

い提ちようちん灯の火が一つ動き出して、がらがらと街鉄がいてつの鋪しき石の上を駛走しそくして来た旧式な相乗りの俵くるまがぴたりと私の前で止まつた。

「旦那だんな、お乗んなすつて下さい。」

深い 饅頭まんじゆう笠がさに雨合羽あまがつばを着た車夫の聲が、車軸しゃじくを流す雨の響きの中に消えたかと思うと、男はいきなり私の後へ廻つて、羽は二重ふたえの布を素早く私の両眼の上へ二た廻り程巻きつけて、蟀谷こめかみの皮がよじれる程強く緊しめ上げた。

「さあ、お召しなさい。」

こう云つて男のざらざらした手が、私を掴んで、惶あわたたしく俵の上へ乗せた。

しめつぽい匂いのする幌ほろの上へ、ぱらぱらと雨の注ぐ音がする。

疑いもなく私の隣りには女が一人乗つて居る。お白粉しろいの薰りと暖かい体温が、幌の名へ蒸すように罩こもつていた。

轆かじを上げた俵は、方向を晦くらます為めに一つ所をくるくると二三度廻つて走り出したが、右へ曲り、左へ折れ、どうかするとLabyrinthの中をうろついて居るようであつた。時々電車通りへ出たり、小さな橋を渡つたりした。

長い間、そうして俵に揺られて居た。隣りに並んでいる女は勿もちろん論んT女であろうが、黙つて身じろぎもせずいなくに腰かけている。多分私の眼隠めかくしが嚴格に守られるか否かを監督する為めに同乗して居るものらしい。しかし、私は他人の監督がなくても、決してこ

の眼かくしを取り外す気はなかつた。海の上で知り合いになつた夢のような女、大雨の晩の幌の中、夜の都会の秘密、盲目、沈黙——凡べての物が一つになつて、渾然たるミステリーの靄の裡に私を投げ込んで了つて居る。

やがて女は固く結んだ私の唇を分けて、口の中へ巻煙草を挿し込んだ。そうしてマツチを擦つて火をつけてくれた。

一時間程経つて、漸く俵は停つた。再びざらざらした男の手が私を導きながら狭そうな路次を二三間行くと、裏木戸のようなものをギーと開けて家の中へ連れて行つた。

眼を塞がれながら一人座敷に取り残されて、暫く座つてしていると、間もなく襖の開く音がした。女は無言の儘、人魚のように体を崩

して擦り寄りつつ、私の膝ひざの上へ仰向きに上半身を寄せかけて、  
そうして両腕を私の項うなじに廻して羽二重の結び目をはらりと解いた。  
部屋は八畳位もあろう。普請ふしんと云い、装飾と云い、なかなか立派  
で、木柄きがらなども選んではあるが、丁度この女の身分が分らぬと同  
様に、待合とも、妾しやうたく宅とも、上流の堅気な住まいとも見極め  
がつかない。一方の縁側の外にはこんもりとした植え込みがあつ  
て、その向うは板いた塀べいに囲われている。唯これだけの眼界では、  
この家が東京のどの辺にあたるのか、大凡おおよその見当すら判わからな  
った。

「よく来て下さいましたね。」

こう云いながら、女は座敷の中央の四角な紫檀したんの机へ身を寄せか



けて、白い両腕を二匹の生き物のように、だらりと卓上に匍はわせた。襟のかかった渋い縞しまお召めしに腹合わせ帯をしめて、銀杏いちようがえ返しに結ゆつて居る風情ふぜいの、昨夜と恐ろしく趣が變つて居るのに、私は先まず驚かされた。

「あなたは、今夜あたしがこんな風をして居るのは可笑おかしいと思つていらつしやるんでしょう。それでも人に身分を知らせないようにするには、こうやつて毎日身なりを換えるより外に仕方がありませんからね。」

卓上に伏せてある洋盃コップを起して、葡萄酒ぶどうしゆを注つぎながら、こんな事を云う女の素振りしおは、思ったよりもしとやかに打ち萎しおれて居た。

「でも好よく覚えて居て下さいましたね。上海でお別れしてから、

いろいろの男と苦勞もして見ましたが、妙にあなたの事を忘れることが出来ませんでした。もう今度こそは私を棄てないで下さいまし。身分も境遇も判らない、夢のような女だと思つて、いつまでもお付き合いなすつて下さい。」

女の語る一言一句が、遠い国の歌のしらべのように、哀韻あいいんを含んで私の胸に響いた。昨夜のような派手な勝ち気な伶俐りはつな女が、どうしてこう云う憂鬱ゆううつな、殊勝な姿を見せることが出来るのであろう。さながら万事を打ち捨てて、私の前に魂を投げ出してゐるようであつた。

「夢の中の女」「秘密の女」朦朧もうろうとした、現実とも幻覚とも区別の附かない Love adventure の面白さに、私はそれから毎晩のよ

うに女の許もとに通い、夜半よなかの二時頃迄遊んでは、また眼かくしをして、雷門まで送り返された。一と月も二た月も、お互に所を知らず、名を知らずに会見していた。女の境遇や住宅を搜さがり出そうと云う気は少しもなかつたが、だんだん時日が立つに従い、私は妙な好奇心から、自分を乗せた俵が果して東京の何方どっちの方面に二人を運んで行くのか、自分の今眼を塞がれて通つて居る処は、浅草から何どの辺あたに方あたつて居るのか、唯それだけを是非とも知つて見たくなつた。三十分も一時間も、時とすると一時間半もがらがらと市街を走つてから、轆を下ろす女の家は、案外雷門の近くにあるのかも知れない。私は毎夜俵に揺す振られながら、此処ここか彼処あそこかと心の中に憶測おくそくを廻めぐらす事を禁じ得なかつた。

或る晩、私はとうとうたまらなくなつて、

「一寸でも好いから、この眼かくしを取つてくれ。」

と俾の上で女にせがんだ。

「いけません、いけません。」

と、女は慌てて、私の両手をしツかり抑えて、その上へ顔を押しあてた。

「何卒そんな我が儘を云わないで下さい。此処の往来はあたしの秘密です。この秘密を知られればあたしはあなたに捨てられるかも知れません。」

「どうして私に捨てられるのだ。」

「そうなれば、あたしはもう『夢の中の女』ではありません。あ

あなたは私を恋して居るよりも、夢の中の女を恋して居るのですもの。」

いろいろに言葉を尽して頼んだが、私は何と云つても聴き入れなかつた。

「仕方がない、そんなら見せて上げましょう。……その代り一寸ですよ。」

女は嘆息するように云つて、力なく眼かくしの布を取りながら、

「此処どこが何処どこだか判りますか。」

と、心こころ許もとない顔つきをした。

美しく晴れ渡つた空の地色は、妙に黒ずんで星が一面にきらきらと輝き、白い霞かすみのような天の川が果てから果てへ流れている。狭

い道路の両側には商店が軒を並べて、燈火の光が賑やかに町を照らしていた。

不思議な事には、可なり繁華な通りであるらしいのに、私はそれが何処の街であるか、さっぱり見当が附かなかつた。俵はどんなその通りを走つて、やがて一二町先の突き当りの正面に、精美堂と大きく書いた印形屋いんぎようやの看板が見え出した。

私が看板の横に書いてある細い文字の町名番地を、俵の上で遠くから覗のぞき込むようにすると、女たちまは忽ち気が附いたか、

「あれッ」

と云つて、再び私の眼を塞ふさいで了しまつた。

賑やかな商店の多い小路で突きあたりに印形屋の看板の見える街、

——どう考えて見ても、私は今迄通ったことのない往来の一つに違いないと思つた。子供時代に経験したような謎なぞの世界の感じに、再び私は誘いざなわれた。

「あなた、あの看板の字が読めましたか。」

「いや読めなかつた。一体此処は何処なのだか私にはまるで判らない。私はお前の生活に就いては三年前の太平洋の波の上の事ばかりしか知らないのだ。私はお前に誘惑されて、何だか遠い海に向うの、幻の国へ伴つれて来られたように思われる。」

私がこう答えると、女はしみじみとした悲しい声で、こんな事を云つた。

「後生だからいつまでもそう云う気持で居て下さい。幻の国に住

む、夢の中の女だと思つて居て下さい。もう二度と再び、今夜の  
ような我が儘を云わないで下さい。」  
女の眼からは、涙が流れて居るらしかった。

その後暫く、私は、あの晩女に見せられた不思議な街の光景を忘  
れることが出来なかつた。燈火のかんかんともっている賑やかな  
狭い小路の突き当りに見えた印形屋の看板が、頭にはツきりと印  
象されて居た。何とかして、あの町の在りかを捜し出そうと苦心  
した揚句、私は漸く一策を案じ出した。

長い年月の間、毎夜のように相乗りをして引き擦り廻されて居る  
うちに、雷門で俵がくるくると一つ所を廻る度数や、右に折れ左



に曲る回数まで、一定して来て、私はいつともなくその塩梅あんばいを覚え込んでしまった。或る朝、私は雷門の角へ立つて眼をつぶりながら二三度ぐるぐると体を廻した後、この位だと思ふ時分に、俤と同じ位の速度で一方へ駆け出して見た。唯好い加減に時間を見はからつて彼方かなた此方こなたの横町を折れ曲るより外の方法はなかつたが、丁度この辺と思ふ所に、予想の如く、橋もあれば、電車通りもあつて、確かにこの道に相違ないと思われた。

道は最初雷門から公園の外郭を廻つて千束町に出て、龍泉寺町の細い通りを上野の方へ進んで行つたが、車坂下で更に左へ折れ、お徒町かちまちの往來を七八町も行くときやがて又左へ曲り始める。私は其処でハタとこの間の小路にぶつかった。

成る程正面に印形屋の看板が見える。

それを望みながら、秘密の潜んでいる巖窟がんくつの奥を究めきわでもする

ように、つかつかと進んで行つたが、つきあたりの通りへ出ると、

思いがけなくも、其処は毎晩夜店の出る下谷竹町の往来の続きで

あつた。いつぞや小紋の縮緬ちりめんを買つた古着屋の店もつい二三間

先に見えて居る。不思議な小路は、三味線堀と仲お徒町の通りを

横に繋つないで居る街路であつたが、どうも私は今迄其処を通つた覚

えがなかつた。散々私を悩ました精美堂の看板の前に立つて、私

は暫くたたずゝんで居た。燦爛さんらんとした星の空を戴いたいて夢のような神秘

な空気に蔽おほわれながら、赤い燈火を湛たえて居る夜の趣とは全く異

り、秋の日にかんかん照り附けられて乾涸ひからびて居る貧相な家並を

見ると、何だか一時にがっかりして興が覚めて了った。

抑え難い好奇心に駆られ、犬が路上の匂においを嗅かぎつつ自分の棲すみ家へ帰るように、私は又其処から見当をつけて走り出した。

道は再び浅草区へ這はい入つて、小島町から右へ右へと進み、菅橋すがばしの近所で電車通りを越え、代地河岸を柳橋の方へ曲つて、遂ついに両国の広小路へ出た。女が如何いかに方角を悟からせまいとして、大迂だいうか廻いをやつていたかが察せられる。薬研掘やげんぼり、久松町、浜町と来て蠣浜橋かきはまばしを渡つた処で、急にその先が判らなくなつた。

何んでも女の家うちは、この辺の路次にあるらしかつた。一時間ばかりかかつて、私はその近所の狭い横町を出つ入りつした。

丁度道了どうりようごんげん権現ごんげんの向い側の、ぎつしり並んだ家と家との庇間ひあわい

を分けて、殆ど眼につかないような、細い、ささやかな小路のあ  
るのを見つけ出した時、私は直覺的に女の家がその奥に潜んで居  
ることを知った。中へ這入つて行くと右側の二三軒目の、見事な  
洗い出しの板塀に囲まれた二階の欄干から、松の葉越しに女は死  
人のような顔をして、じつと此方を見おろして居た。  
思わず嘲るような瞳を挙げて、二階を仰ぎ視ると、寧ろ空惚け  
て別人を装うものの如く、女はにこりともせず私の姿を眺めて  
居たが、別人を装うても訝しまれぬくらい、その容貌は夜の感  
じと異つて居た。たツた一度、男の乞いを許して、眼かくしの布  
を弛めたばかりに、秘密を発かれた悔恨、失意の情が見る見る色  
に表われて、やがて静かに障子の蔭へ隠れて了つた。

女は芳野と云うその界限かいわいでの物持の後家であつた。あの印形屋の看板と同じように、凡すべての謎は解かれて了つた。私はそれきりその女を捨てた。

二三日過ぎてから、急に私は寺を引き払つて田端たばたの方へ移転した。私の心はだんだん「秘密」などと云う手ぬるい淡い快感に満足しなくなつて、もツと色彩の濃い、血だらけな歓楽を求めるように傾いて行つた。



# 青空文庫情報

底本：「刺青・秘密」新潮文庫、新潮社

1969（昭和44）年8月5日発行

2011（平成23）年11月20日84刷改版

2014（平成26）年6月5日87刷

初出：「中央公論」

1911（明治44）年11月

※「群集」と「群衆」の混在は、底本通りです。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：「ハルナ

校正：まつもこ

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 秘密

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>